

テーマ：フランスにおけるピアノ教育の伝承 ～ショパンから私たちへ～

講師：ジャン＝マルク・ルイサダ

通訳：カトリーヌ・アンスロー

要旨

第11回ショパン国際ピアノコンクール（1985年）に入賞以来、世界各地で演奏活動を行うジャン＝マルク・ルイサダ氏は、演劇など他分野の芸術について幅広い見識を有し、ピアノ教育の分野においても、23歳のときにはすでに地方の音楽院で子供の指導を始め、その後もピアニストとしての活動と並行して、各地でマスタークラスを行うなど多くの経験を重ねて来られました。ピアノ指導が自身の喜びでもあると語る氏から、この度の全国研究大会の講演の内容として、提示されたのは、「フランスにおけるピアノ教育の伝承」(L'art de la transmission) というテーマです。

当講演では、ショパン、その弟子たち、またアルフレッド・コルトー等を通じて、フランスで受け継がれてきた指導法、さらにルイサダ氏自身が、恩師M.シャンピ、N.ブーランジェ、V.ペルルミュテル、D.メルレ、P.パドゥラ・スコダ等から学んだこと、ひいては現在のご自身のピアノ指導法についてもお話くださるとのこと。時代を追って、ロシアなど、他国の流派の影響も受けながら、豊かに発展してきた演奏法と、「伝承の大切さ」を踏まえたピアノ教育の奥義を伺えることと期待されます。

なお、この講演は、2020年の研究大会での実施が予定されていましたが、コロナ禍により中止となり、今回ようやく実現に至りました。講演に向けての事前インタビューは、2019年の会報誌 Klavier Post 139号に記載されていますので、ご興味おありの方は合わせてご参照ください。

(文責：実行委員会)

【MEMO】

.....

.....

.....

.....

.....